

「聖所の正しさ」

ダニエル書 8 : 8 - 14

8 : 21 - 26

July.5.2020

ダニエル 8 : 8 - 14、21 - 26 (パワポ)

Preface

私たちの人生には、苦難の泉があるかのように感じてしまうほどに、苦難が伴います。

そして、痛みを覚えます。

程度の違いはあれど、私たちの人生には痛みがあります。

ある人は喪失の痛みがあり、ある人には裏切りの痛みがあります。

またある人には、試練という痛みがあります。

ある人には、人から認められないという痛みがあります。

ある人には、失敗から来る痛みがあり、

ある人には夢が破れるという痛みがあります。

また過去の傷から来る痛みがあります。

様々な痛みがありますが、人生における痛みや苦難は、誰も避けることの出来ない、人生の一部です。

昼と夜があるように、光と闇があるように、痛みや苦難は、私たち生きる上で必ず伴うものであります。

そして、私たちは誰もが、出来るならば苦難や痛みから自由になりたいと思っています。

私自身も、出来るならば、苦難や痛みから自由になりたいと思うことが多々ありますが、

それと同時に、苦難や痛みがあったからこそ、体験できた、また知ることのできた恵みがあることも、経験上分かっています。

ヘレン・ケラーは、目が見えず、耳も聞こえず、話すことも出来ないという三重苦を持って生まれてきましたが、その苦痛をひとつひとつ乗り越えて行きながら、こう言いました。

「世の中は、苦難と痛みで満ちているけれども、一方で、それを乗り越えていく栄光にも満ちています。」

苦難や痛みが、人を卑屈にしてしまうこともあります、  
逆に人を成長させ、成熟させ、円熟させ、痛みや苦難が良き教師になることもあります。

### Part One

また、神を信じながら歩んでいても、どうしても納得しにくい、もしくは理解し難い苦難や痛みがあります。

でも、その苦難の前にへりくだって、その痛みが語り掛ける小さいけれども、確かに聞こえる声に、耳を傾けるならば、恵みや恩恵が見えてきます。

貧しさを通ったからこそ、与えられることに感謝を覚えるようになり、分かち合うことや物を大切に扱うことの大切さを知り、無い中でやりくりする知恵が付き、そして自分の食欲さや意地汚さが見えるようになったりもします。

富んでいる時には、富が与える喜びの果かなさに気付かされ、富に群がる人の強欲さに傷つき、富を目的に生きることの情の薄さを悟らされたりもします。

病にかかれば、普段普通になんてことなくしていたことが、なんて感謝なことなのかに気付かされたり、

病ゆえに弱っていたり、肉体的精神的に苦しんでいる人の気持ちが理解できるようになったりもします。

裏切られれば裏切られた痛みにも共感でき、

人から認められないという痛みを通れば、人を認めないという枠がなんて非人格的で、酷いものなのかにも気づかされます。

### Part Two

そして、どんな苦難や痛みも、必ず去っていく事も知ります。

主イエス様の受けた十字架の苦難も、沈着に見れば、三日に過ぎませんでした。

苦難や痛みは、客のようにやってきて、時が過ぎれば去っていきます。

また、捉えようによっては、苦難や痛みは、教師のように訪ねて来て、私たちに教訓を残して、私たちの傍を離れて行きます。

苦難や痛みは、良く用いれば、私たちに祝福もすれば、祝福そのものにもなります。

苦難ゆえに強められ、苦難ゆえに丈夫になり、苦難ゆえに賢くなります。

そして、何よりも、苦難と痛みゆえに、主なる神様をさらに近くにすることが出来ます。主なる神様に、近づかずにはいられなくなります。

主なる神様に近づいていくと、その時、私たちの苦難と痛みが、祝福に変わります。

苦難と痛みは、私たちに恐れを抱かせ、すくませてしまうこともあります。苦難と痛みゆえに、神の前に出て行くならば、本当に大切なものが何のかが見えてきます。

そして、その大切なものに素直に答えていくならば、祝福になります。

私たちは、苦難や痛みを前にすると、「この苦難と痛みを止めてください。」と、言葉にならないような呻きのような祈りで、祈りがちですが、

最初にお話ししましたように、私たちの人生から、苦難や痛みはなくなりません。切っても切れない、私たちの人の人生の一部です。

ならば、苦難や痛みを共にしながら、成長するために、神様に苦難や痛みを乗り越える心をくださいと祈りながら、助けていただかなければならないですね。

### Part Three

今日の聖書箇所は、そんな苦難や痛みの中でも、私たちクリスチャンにのみ許された“迫害”という苦難と痛みがあることを教えてくれます。

この“迫害”は、ある意味、クリスチャンとして全うに生きるならば、必ず伴う苦難と痛みだと、聖書が教えています。

#### テモテへの手紙第二 3 : 12 (パウロ)

キリスト・イエスにあつて、敬虔に生きようと願う者みな、“迫害”という苦難と痛みを受けます。

先週見ましたように、ダニエル書 8 章 8 節からの聖書箇所は、紀元前 180 年頃にあったギリシャのセレウコス王朝の王、アンティオコス・エピファネス 4 世によるイスラエル民族に対する大迫害を預言したものです。

アンティオコス・エピファネス 4 世は、主なる神を信じる民 4 万人を殺し、4 万人を奴隷として売り飛ばし、神を礼拝する神殿を打ち壊し、神の言葉である聖書を焼き尽くし、唯一まことの真理を地に投げ捨てました。

では、なぜ、彼がそのような迫害を行ったのか？

それは、古代ギリシャ文化の啓蒙と普及のためです。

以前見ましたように、現代社会にも色濃く影響を与えているローマ帝国の精神的支柱にもなっていたのが、古代ギリシャ文化です。

唯一まことの神の存在を否定し、人間こそすべてであり、人間こそ神のような存在になり得る存在であり、その人間が作る文明社会こそ善であり、まことであるという人本主義に立脚した思想です。

この思想と世界観からすると、キリスト教信仰は異質であり、うっとうしく思え、また脅威に感じるかもしれません。

ギリシャ文化の世界観を、強圧的に押し付けるために、唯一まことの神を信じその信仰と、信仰者を迫害しました。

私たち日本のキリスト教宣教においても、何度も迫害を経験してきました。

時の将軍や権力者よりも、唯一まことの神こそ確かであり、イエス・キリストこそ救い主であると告白する信仰が疎んじられ、大迫害を受けることがありました。

そして、その迫害に対するキリスト者の反応は、様々でした。

信仰のために殉教する者もいれば、信仰を捨てる者もいれば、信仰を失ってはいないけれども、生き延びるために妥協をする者もいれば、妥協をしたことを悔いて、改めて真正クリスチャンとして歩む者もいれば、「命を守るために当然のことをしたまでだ！」と、開き直る者もいれば、その迫害に対する反応は様々でした。

特に、私たちの記憶に新しいところは、戦中の日本のキリスト教会の姿です。

“天皇崇拝は宗教にあらず”と言う大日本帝国の主張に反するクリスチャンや教会指導者たちもいましたが、

大半の教会指導者、牧師、そしてクリスチャンたちは、“天皇は宗教にあらず”という教えを受け入れ、礼拝の中で、宮城遥拝をし、君が代を斉唱し、国旗掲揚する姿がありました。

でもその後、迫害をうまいこと避けるために妥協してしまったということも悔いて、日本全国の教会・教会指導者・クリスチャン一同皆で断食祈祷しながら、

衣を破って、灰をかぶりながら、神様の御前に出て行ったというようなことはなく、一部のクリスチャン、もしくは、一部の教会、教団、教会指導者たちの間で、その事実を直視し、受け止め、悔い改めようとする動きしか起こりませんでした。

このことについて、神学者や牧師の中には、その執筆した論文の中で、こんなことを言っていたりもします。

「戦後の日本の教会は、神の裁きの中にあり、戦時下の教会の姿勢を悔い改めない限り、日本の教会にリバイバルが起こることはないだろうし、

イスラエルの民たちが70年間バビロン捕囚にあったように、日本の教会も戦後70年間、バビロン捕囚のような状態にあり、その偶像崇拜と戦争責任を悔い改めない限り、神様は日本の教会に繁栄をくださることはないだろう。」

キリスト・イエスにあつて敬虔に生きようと願う者ならばみな受ける“迫害”という苦難と痛みを直面したけれども、その苦難と痛みを真摯に向き合わなかった結果、

また、その苦難と痛みが語り掛けてくる声を聞こうとしない姿勢や高慢さが、結果的に、膿となり、迫害という苦難と痛みという包み紙に包まれた祝福を享受することが出来なくなってしまっているというわけですね。

迫害を恐れない教会ではなく、迫害を恐れる教会、

迫害を避けないクリスチャンではなく、迫害を避けるクリスチャン、

世の強大な力で迫られた時、信仰を貫き通す信仰者ではなく、世の力に嫌々ながらも丸め込まれていく信仰者、

常識や学識だという静かだけれども有無を言わさないほどの猛烈な影響力を持つ世の世界観を持って迫られた時、世の常識だから、学識だからと自分に言い聞かせながら、まんまとその世界観に染まってしまう信仰観。

人の作り上げた常識以上にはなれない信仰スタイル。信仰姿勢。

#### Part Four

私たち人間が経験するすべての苦難や痛みは、祝福にもなれば、呪いにもなります。

そして、クリスチャンにのみ許された“迫害”という苦難と痛みも、祝福にもなれば、呪いや呪縛、縛りにもなります。

せっかく真の自由を謳歌する特権を与えられているにもかかわらず、“迫害”と真つ向から対峙しないために、いつの間にか、世が与える“枠”に捕らえられ、縛られていきます。

ダニエルは、少年の頃から年老いた時まで、その一生を“迫害”という環境の

中で生きました。

彼は、四六時中、バビロン帝国という世界観、ペルシア帝国という世界観、そしてその世界観の中で発展してきた強大な権力と富の前に、“迫害”を受けてきました。

私たちが見てきましたように、ダニエルは実際、信仰を貫き通すために、命を失うような場面も何度も通ってきました。

そして、その“迫害”という苦難と痛みと直面した彼がしたことは、生き延びるために“迫害”を避けるのではなく、主にあって生きるために、また、真の自由を謳歌する特権を守るために“迫害”と対峙して、

迫害からくる苦難と痛みゆえに、神から遠ざかるのではなく、さらに神に近づき、

“迫害”の奥にある幼稚でくだらない動機を見抜き、それでも感じる“迫害”から来る恐れを、主の前に吐露しました。

そして、“迫害”に屈しないという知恵を与えられ、“迫害”という敬虔に生きようとするすべてのクリスチャンだけに許された苦難と痛みが、祝福に変わる体験をしました。

一粒の麦が地に落ちて死んだら、豊かな実を結んだ信仰体験をしたわけです。

### ヨハネ 12 : 24 - 26 (パワポ)

父なる神に仕えると決心して、実行に移して、神が自分を重んじてくださったという尊い祝福を、ダニエルは味わったわけです。

## Part Five

そんなダニエルに、神様が示されたのが、375年後に自分の民族、つまり、神の民であるイスラエル民族・ユダヤ民族に対して起こる大迫害の幻です。

まだ見ぬ巨大なギリシャ帝国という強大な権力と世界観による大迫害を見せられました。

しかし、その示された幻の末尾は、希望で終わります。見てください。もう一度読んでみます。

### ダニエル 8 : 8 - 14、21 - 25 (パワポ)

そのとき、聖所の正しさが確認される。ダニエル8：14（パワポ）  
しかし、人の手によらずに彼は砕かれる。ダニエル8：25（パワポ）

“迫害”には大きな苦難と痛みを伴いますが、その間違っただ行いは、時が来れば必ず崩れ去り、むしろ、聖所の正しさが確認されるようになると言います。

つまり、“唯一まことの三位一体なる神様を礼拝することの正しさ”が世に示され、

神を礼拝することこそ最善であり、  
神を礼拝することこそすべての本質であり、  
神を礼拝することこそ不変の真実であり、  
神を礼拝することのみが、最後まで残るということが明らかにされ、  
父なる神様を信じ歩むことは、迫害を受けるに価する尊いものだという事、  
キリスト・イエスの救いは、朽ちてなくなる肉体やこの世を遥かに勝る宝であり、  
奥義であること、

キリストにあつて、聖霊の宮とされた喜びが、疑う余地のない事実であるということが、確認されると言うのです。

神の与えたもうた“迫害”という苦難と痛みが、キリストにあつて敬虔に生きようと願う者たちにとって、祝福となるというのです。

聖書の中には、“迫害”が祝福の源になった話がたくさんあります。

叔父ラバンによる執拗なヤコブへの迫害、  
10人兄弟が束になって、奴隷として売り飛ばしたヨセフへの迫害、  
エジプトによるイスラエル民族に対する迫害、  
ヨブへの3人の友人による迫害、  
サウルによるダビデへの迫害、  
時の権力者による預言者エリヤへの迫害、  
アッシリヤ帝国やバビロン帝国によるイスラエルへの迫害、

新約聖書に入れば、  
メシヤ誕生を恐れたヘロデ王の幼児に対する迫害、  
イエス様に対するパリサイ人、律法学者、長老、為政者のみならず、実の家族からの迫害、

聖霊降臨後の弟子たちへの迫害、  
パウロによる信仰と聖霊に満ちた人ステパノへの迫害、  
ステパノ殺害後、エルサレム教会が散ってしまうほどの迫害、  
諸教会への外からと、中からの迫害。  
聖書の最後を飾るヨハネの黙示録にかかっている迫害、  
そのヨハネの黙示録の著者である弟子ヨハネへの迫害、等々、

聖書の中にはありとあらゆる迫害が記録されています。

家族からの迫害、国家からの迫害、職場からの迫害、学び舎からの迫害、仲間だと思っていた者からの迫害、他宗教からの迫害、サタンや悪霊による迫害、時の権力・風習・習わしからの迫害。

そして、これらの迫害を、みんな好き好んで受けたわけではありません。

ある意味強いられて、そして、その強いられた迫害に、信仰を持って対峙し、祝福を体験したことまで、記録されています。

### Part Six

そこで、これを持って問われるのが、“では私たちが守りたいものは何なのか”ということです。

“何を守るための迫害なのか？”ということです。

私たちが守りたいものは、イエス・キリストを信じる信仰でしょうか？

神を礼拝することでしょうか？ 神の言葉でしょうか？ キリストの体である信仰共同体でしょうか？

それとも、私たちが守りたいものは、お金でしょうか？ 家でしょうか？ 知識でしょうか？ 組織でしょうか？ 良い評判でしょうか？ 子どもでしょうか？ 地位でしょうか？ 名声でしょうか？ 人生経験やプライドでしょうか？ 健康でしょうか？ 常識でしょうか？ 私の願いでしょうか？ 私の思いでしょうか？ 家族でしょうか？ 安定でしょうか？ 民族でしょうか？ 国でしょうか？

全部大事なものですし、守るに値するものです。

お金も、家も、知識も、組織も、良い評判も、子どもも、地位も、名声も、人生経験やプライドも、健康も、常識も、私の願いや思いも、家族も、安定も、民族も、国も、大事です。

これら全部守るに値するものですし、ある意味、これらのものを守るために私たち日々の暮らしを送っています。

そして、その日々の暮らしを神様が守ってくださっています。

また、それが恵みでもあります。

しかし、これらを守るために、信仰ゆえの“迫害”と真摯に対峙しないならば、このすべてが、呪いになりかねないものでもあります。



## 申命記 28 : 15, 20 (パワポ)

何を守るための人生なのか？  
私が生きる理由とは何なのか？

迫害という筆舌に尽くしがたい苦難と痛みは、私たちの視線を本質的な者へと向けさせます。

そして、何が大切で、何のために生き、何を守るために生きているのか、問われます。

私が辛いなあとか、苦しいなあとか、痛いなあと思うたびに、思い出す賛美があります。

で、その賛美を口ずさむと、いつも湧いてくる言葉があります。

それは、“You are my reason.” という言葉です。 “You are my reason.”

「あなたが私の生きる理由です。

イエス様、あなたこそ、私の生きる理由です。

イエス様、あなたが、私の人生の理由です。」 という言葉です。

イエス様が、私の生きる理由です。

これがなければ、生きる理由はありません。

大事なものはたくさんあります。

しかし、イエス様に勝る、大事なものはありません。

苦難や痛みは、私たちに大事なものが何なのかを、気付かせてくれますが、

その中でも、特に、クリスチャンにのみ許された“迫害”という苦難は、

“イエス様に勝る大事なものはない” という悟りと、

“イエス様に勝る大事なものはない” という生き方へと、導きます。

これが、ダニエル 8 : 14 の言う

**ダニエル 8 : 14 (パワポ)**

**そのとき聖所の正しさが確認される。**

という言葉の意味です。

## Conclusion

私たちが生きている時代が、どんな時代なのかをよく説明している聖書箇所

があります。 第二テモテへの手紙です。

使徒パウロの最後の手紙、迫害ゆえに処刑される前に書き残した、遺言のような手紙です。

### テモテへの手紙第二 3 : 1 - 1 2 (パウロ)

今の時代は困難な時代です。

見かけは敬虔であっても、敬虔の力を否定し、いつも学んでいるのに、いつになっても真理を知ろうとしない時代です。

そして、このような愚かさが、すべてはつきり分かるようになる時代です。

またこんな時代でもあります。

### テモテへの手紙第二 4 : 3 - 5 (パウロ)

耳障りな聖書の言葉は聞きたくない、自分の好みに合う神の言葉だけを寄せ集め、偏食する時代です。

そして、偏食した聖書の話をもって、世の作り話に反れていくような時代です。

こんな時代の中、キリスト・イエスにあって、敬虔に生きようと願う者は、みな、迫害を受ける時代でもあります。

でも、大丈夫です。

### テモテへの手紙第二 4 : 1 7 - 1 8 (パウロ)

ダニエルが、迫害ゆえに獅子の穴に投げ込まれたにもかかわらず、そこから救い出され、天の御国を仰ぎ見たように、

使徒パウロも、迫害という獅子の口から救い出されたことが、何度もありました。

そして、この“獅子の口からの救い”とは、今ある命に生還することだけを表すのではなく、

迫害ゆえに命を失っても、天の御国に入れられ、まことの永遠のいのちを生きることでもあります。

今ある命に生還しようが、生還しまいが、キリストにあって敬虔に生きようと願う者が、結果的に、天の御国に入れられるならば、それすべてが救いです。

事実、この後、使徒パウロは、信仰ゆえの迫害によって、ギロチンで処刑されていきました。

そして、栄光の天の御国へと入れられていきました。

迫害は、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者、皆にあるものです。

でも、これは、苦難と痛みという包装紙に包まれた、祝福でもあります。

この祝福ゆえに、聖所の正しさが確認され、  
真理を悟り、  
世の愚かさがはっきりと分かり、  
主なる神様のご栄光が現わされ、  
まことの慰めによって、大いに慰められます。

だから、私たち皆、受ける迫害に真摯に対峙し、  
迫害によってのみ知れる祝福を、大いに享受する、恵まれたキリスト者とされることを、願ってやみません。

お祈りいたしましょう。

祝祷：テモテへの手紙第二 3：12